

### 〈3.11〉から 12 年目を迎えて

2011 年に始まった東日本大震災は、いまなお収束することのない原発事故と広大で深刻な放射能汚染によるさまざまな被害を抱えたまま、この 2022 年 3 月 11 日に 12 年目を迎えます。

福島県やその近隣諸県の被災汚染地域からの避難者の不安定な生活と、こうした被災汚染地域に暮らしつつ被曝被害の心配を抱えた生活は、ともに現在も続いているが、10 年目の節目を超えたことによる報道の減少と、新型コロナウィルスの流行による苦境とが相まって、原発事故の被災被害に対する社会的関心は著しく低下していることを痛感しています。保養活動などを支える寄付が集まりにくくなる一方で、そもそもコロナ感染予防のために保養企画の大半が中止に追い込まれています。そのことが、原発事故被災者をますます孤立させることになるのではないかと強く懸念します。

他方で、311 受入全国協議会（通称：うけいれ全国）およびその加盟団体では、支援を続けてくださる貴重な寄付団体の助けも借りて、可能なかぎりの保養活動の維持を試みてきました。家族単位での保養や、比較的近距離での保養など、感染防止と両立した企画を模索したり、またオンラインで保養団体とこれまでの参加者との交流会を開催したりすることに尽力しました。またこれらの企画への反応から、まだ原発事故が終わっていないこと、全国の保養の火は消えていないことを受けとめ、そのことも広くアピールしてきました。

被災者の心労をねぎらうとともに、保養団体および寄付団体のみなさまの努力に深く感謝いたします。

\*

こうした 12 年目の〈3.11〉が近づきつつあるこの 2 月末に、ロシアによるウクライナ侵攻という、世界を震撼させるニュースが駆け巡りました。この侵攻による犠牲者を哀悼しつつ、一刻も早くロシアがウクライナから撤退し停戦することを願っています。

この侵攻からまもなく、私たち自身の〈3.11〉の経験に照らして無視できないものとして、三つの出来事が発生しています。一つめは、ウクライナにあるチェルノブイリ原発をロシア軍が占領したことです。チェルノブイリ原発はウクライナがソ連領だった 1986 年に深刻な爆発とメルトダウンの事故を引き起こし、隣接するベラルーシやロシアをはじめ広大な地域を放射能で汚染しました。大規模な健康被害と避難移住と保養活動があったことや、事故原発が廃炉にできず石棺として封鎖されることとなったことなど、東京電力福島第一原発のメルトダウン事故の際に常に引き合いに出され参考されてきました。そのチェルノブイリ原発を管理している作業員がロシア軍の占領下で不自由を強いられ、事故原発からの放射線量にも急上昇が見られるとも報じられています。チェルノブイリ原発事故も 36 年経ってもまだ終わってはいないのです。12 年目の私たちは、まだまだこの先、数十年も不安が続くことを感じさせられました。

二つ目は、交戦中にウクライナのザポロジエ原発に対してロシア軍が砲撃し火災が発生したことです。原子炉そのものに着弾しなくとも、冷却システムに損傷があればメルトダウンには十分になります。そしてそのもたらす影響の範囲はミサイルの比ではないことを私たちは身をもって知っています。原発は、存在し稼働しているだけで、潜在的に社会に対し壊滅的なリスクを持っているということを、この砲撃の一件であらためて確認させられました。私たちの直接的な活動目的は脱原発ではありませんが、日本全国にある原発がつねに東電福島原発の事故と同様の被害を引き起こしうること、うけいれ全国の活動は将来の潜在的な事故に対する取り組みにもつながっていることを、忘れないようにしたいと思います。

第三に、戦禍から逃れるための避難民が 200 万人以上ウクライナから近隣ヨーロッパ諸国に流入していることです。そして流入先の各地では、避難者を迎えるために多くの市民が自宅の一室を開放しており、実際に避難家族の規模に応じて受け入れが進んでいます。その光景は、やはり私たちの 2011 年の〈3.11〉の経験を彷彿とさせました。あのとき、次から次へと原発事故被災地の周辺から避難者が発生し、北海道から沖縄まで離散しました（強制避難と自主避難とを合わせて推計で数十万人に達する）。そして各地では、政府や東電ではなく、一般市民や市民団体・NGO がそうした避難者の受け入れを自発的に進めていたのでした。うけいれ全国の組織化の出発点も、この自発的な受け入れの市民活動にあると言えます。政府・東電の責任を追及することも必要ですが、目の前にいる避難者を迅速に受け入れるには、「市民」の力こそが圧倒的に大切です。次々と到着するウクライナ難民を受け入れていく一般市民の姿を報道を見て、うけいれ全国の活動の原点と「市民」の力の大切さを再確認させられました。

\*

原発事故からの 11 年の時間経過と、コロナや戦争などの不穏な要因とで、被災者も受け入れ団体もますます厳しい状況になってきています。そうだからこそ、私たちのネットワークは重要性を持っています。孤立し疲弊していくことを防ぐために、緩やかにでも繋がっていき、励まし合い、情報を共有し、また再会できる希望を持ち続けたいと思います。

2022 年 3 月 11 日  
311 受入全国協議会・共同代表  
みかみめぐる  
佐藤洋  
早尾貴紀  
谷瀬未紀